

大事にするから逃げないで

金曜日の夜、仕事を終えて帰路を歩く。私の足取りは一週間の疲れを感じさせない軽やかなものだつた。

逸る気持ちを抑えられず早足で賑わう大通りを通り抜け、人通りの少ない小道へ進むと街灯の灯りで浮き出る見慣れた人影を見つけて私は思わず駆け出す。

「おかえり、お疲れ様。」

駆け寄る私に気が付くと、彼は柔らかに微笑み、労いの言葉をかける。

月明かりを反射する真っ白い肌にふんわりとした黒髪が映える美しい青年。

「玲くん、ただいま。迎えに来てくれてありがとう!」

「うん、早く会いたいなって思つて」

玲くんの手が私の頬を優しく撫でる。

煌めきを纏った墨色の瞳に甘く見つめられてドキリ…と胸が高鳴る。お付き合いを始めてしばらく経つけれど、こういうことはめっぽう慣れない…。

元々、体温の高くない彼だけれど、頬に触れている指先がいつもより冷たく感じる。理由は自分でも分かっていた。

「あ、顔真っ赤になってる」

「も、もう…っ。笑わないでよ…。」

「うんうん、笑ってないよ」

そう言う彼の表情は明らかに笑ってたけど、なんだかそれも愛おしく思えて何も言えなくなってしまう。

頬に添えられていた彼の手が次は私の右手を握って横に並ぶ。

「お仕事疲れたよね、はやく帰ってゆつくりしよう。」

二人の足が向かう先は玲くんの自宅。数日前に約束したお泊まりデートだ。他愛もない話をしながら二人寄り添って歩く。

今日行ったランチが安いのにかなり美味しかったとか、駅前の新しい店がもうすぐオープンするらしいとか、そんななんでもない話を彼は楽しそうに聞いている。

うん、そうなんだあ、よかったね、って優しく相槌を打ってくれる彼が好きで、私はいつもお喋りしすぎちゃう。

「…それでね、友達が連れていつてくれるみたいなの！玲くんにもお土産買って…」

饒舌に動いていた私の口はふと意識を逸らされる。

夜風に彼の前髪がふわりと揺れた時、漆黒の髪の毛の隙間から彼の肌とは明らかに色の異なる鮮やかな緑色が見えたから。

「…あれ、おでこ汚れてるよ？ここ、ここ。」

「えつ、ほんと？、さつきまで絵の具片付けてたからかな…」

彼はお金が必要になれば描いた油絵を売って暮らしている、と以前話していた。

いわゆる画家なのだけれど、本人曰く、「僕は画家なんて立派なものじゃない。」という評価みたい。

玲くんの実家はかなり厳しい教育方針で、色々と習い事をしたけれどどれも褒められた経験はほとんどないらしい。

だからなのか、玲くんは自身にあまり自信を持っていない…気がする。

「私ウエットティッシュ持つてるよ、はいどうぞ。」

「わ、ありがとう、助かるよ。……………」

私は鞆からウエットティッシュを一枚取り出して彼へ渡す。が、彼はウエツ

トティッシュを見つめたままなかなか受け取らない。

ん？と疑問を浮かべて首を傾げると彼の視線が私に移り、ウェットティッシュを持つ私の手首を掴んで、色を浮かべた自身の顔へ近づける。

「どこについてるか分かんないから、拭いてほしいかも…なんて」

「もお、甘えたなんだから…」

呆れたような態度をとるけれど、あまり他人に心を開かない彼に甘えられるのは内心、この上なく嬉しい。彼もそれを察しているのか、承諾の言葉はないのに、ん、と瞳を閉じて私が拭き取りやすいように屈んで顔を突き出している。

「お願いしま〜す…」

屈んだ彼の端正な顔が並んで歩く時よりも近くて、とくとくと心臓が速くなる。

鼻筋の通るシュツとした高い鼻、薄く開かれた唇は色気があつて少し小さい、一見、中性的な顔立ちだが、太めの眉が凛々しくて男性的な色気を醸し出している。

伏せられた長いまつげが月の光でキラキラ煌めいて綺麗…。

「…………あれ、どうしたの…?」

「う、ううん！なんでもない！じつとしてっ」

思わず見とれてしまつていたことが恥ずかしくて慌てて繕う。優しく丁寧に
おでこについた絵の具を拭き取ると、彼は「ありがとう」と満足そうだった。

またしばらく歩いてから角を曲がると、胸程の高さで作られた鉄格子の門が見えてくる。その奥にそびえる広い庭と一人暮らしにしては立派すぎる二階建ての一軒家、それが彼の自宅だ。

その鉄格子の門を見て、ふと思ひ出す。

「そういえば、最近あの猫ちゃん見かけないね。」

あの猫ちゃんとは、私と彼が出会うきっかけでもある猫。

この道を自宅への帰路で使っていた私は、たった今いるこの場所、門の前に居つく愛らしい猫に夢中だった。見つめさせてもらったり、ちよつとだけ写真を撮らせてもらったり…。

そんな癒しの日が続いたある日、門の前を占拠する私と猫に「あの…」と今にも消えそうな声で現れたのが彼だった。

家の入り口を通せんぼするなんて迷惑をかけてしまったから、場所をよく考えて行動するべきだった…と後悔していた。

けれど、案外彼は気にしていなかったようで、それから姿を見かければ「こんばんは」と声をかけてくれたり、いつの間にか世間話やお互いの話もするよ

うになつて…、今の關係に至る。

周りを見渡しても、やはりそのもふもふの姿は見当たらない。すると彼が、ああ、と思い出したように私の後ろへと視線を向ける。

「その猫ね、たぶん向かいの家の飼い猫になつてるよ。そこの窓際で首輪つけて寝てるところ、前見たから」

「そうなんだ…！ そつかあ、寂しいけど居場所ができてよかった。」

「うん、幸せそうだった。」

彼はあの猫がいるであろう家の明かりを見て微笑んだ。そして「僕たちも家に入ろう」と言つて繋いでいる手を先ほどまでよりも少しだけ強く握りなおした。

「ねえ、抱き締めて、いい…？」

玄関の扉を閉めるや否や彼が振り返り眼前へと迫る。

私が断ったことなんてないのに、彼はいつも不安そうに聞いてくる。むしろそんな捨てられた子犬のように見つめられられるほど断る理由はなくなってしまうのに。

「うん、いいよ…。」

彼はその返事を聞くと心底嬉しそうに両手を広げて私を胸の中へ収める。

暖かい…、彼の体温がじんわりと私に染み込んでくる。

私もそれに答えて、彼の脇腹からそつと腕を通して抱き締め返す。すると、

私の腕二本分の隙間を埋めるように、私を囲う腕がキュッと締められる。

線は細いけれどそれなりに筋肉のついた男の人らしい身体付き、添えられた骨ばった大きな手、肺をいっぱい満たす玲くんの匂い…、彼の全てが私の心臓をドキドキと煩くしていく。

「まだ抱き締めてるだけなのに、耳まで真っ赤だ。可愛い。」

「だ、だって…仕方がないでしょ、す、好きなんだから。」

「ふふ、ありがとう。僕も好きだよ、大好き。」

彼の瞳が私を見つめて甘く蕩ける。

頬を薄ピンクに染めた端正な顔がゆつくりと近づいてきて、目を瞑る。

軽く触れた唇は少しカサついていて、リップクリームサボったな…、と思いつつも、そのカサついた触感が何度もしてきた…彼とのキスの始まり…って感じで擦りたい。

ちゅ、ちゅ、と角度を変えて降り注ぐキスは段々と私と彼の隙間をなくしていく。

いつの間にか彼の唇は濡れて湿り気を帯びていた。

「んう…、玲くん…♡」

「ん、夢中になっちゃうね…」

「……止められなくなる前にシャワー、浴びたいな…？」

身を清めてつるつるとしたサテン生地の寝巻きへ袖を通し、鏡前で「よし」と気合いを入れてから、薄明かりの灯るベッドルームへ足を運ぶ。

ベッド縁に腰かけ待つ彼は上半身を露わにしている…、その艶やかな情景に

思わず立ちすくみ、喉が渴いたかのようにごくり、と喉を鳴らしてしまう。

彼は私に気づくと、瞳を優しく細めて「…こっちきて」と手招く。甘い罨のような声に招かれて彼の腕の中へ囚われる。

あんず色のライトが重なり合う二人の影をゆらゆらと揺らし始めた。

ちゅ、…ちゅ、ちゅ♡

先ほどの熱を取り戻すかのように触れるだけのキスを繰り返す。

その内、一回一回離れる唇が名残惜しく切なくなってきた、はむっ♡、はむ♡、と甘噛みするような唇の吸い合いがはじまる。

…ぴちゅ♡

彼の舌先が私の下唇を舐めて離れる。その合図でゆっくりと瞼を開けるとほ

のかに頬を染めた玲くんの顔が視界いっぱいに映り込んでいた。

「…キス、気持ちいいね。」

そつと近づいて、熱を帯びた声色を耳元で響かせるから、ゾワゾワとこそばゆい快感が耳の奥から広が리思わすびく…と身体を強張らせる。

それが恥ずかしくて、こくり、と小さく頷くと彼は私の頭上で軽く、ふふ、と笑って再び私の唇を奪っていく。

「んっ、ふう、んむっ…♡、…っんんん♡」

ふわふわと優しく唇を押し付けたり、上唇を挟まれてむにむに…と揉みしだかれたりを繰り返して、離れる寸前、仕上げのようにちゅう…つと唇を吸われて甘い声が鼻から抜ける。

軽いキスではもう我慢できない、と言わんばかりの食べられちゃいそうなキ

スに身も心もとろとろに解かされていく。

「んっ、はあ…ねえ、もつと近くに感じたい…。口、開いて…？」
「ふえ、…あ、……んむ♡」

溶けきった私の唇は言われるまでもなくとろりと隙間を作り、容易に彼の舌が侵入する。

ぬめり、とした生暖かい分厚い舌が、熱を帯びた吐息と共に私の口中をぐちやぐちやに乱していく。

口の中の粘膜の壁を硬くした舌先でなぞりあげられたり、ざらざらの舌同士をべったりくっつけて擦り合わされると、うつとりして頭がぼうつとしてくる。

「は…♡、っふ、ふあ♡」

いつの間にか左手は彼の右手に絡め取られて指を組み合ってぎゅうう…♡と

恋人繋ぎで硬く握られている。

キスで溶かされて気持ちが良いって、彼の手の中に捕まえられている私の手は指先をびく…♡びく…♡と震えさせてしまう。

「手、びくびくしちゃって、可愛い…。僕とのキス、大好きだもんね♡」

「んんう…は、恥ずかしいこと…言わないでえ」

ぺろ、ちゅ、じゅるっ♡、…ぬろん♡、ちゅ、ちゅ♡ ……………♡

「んう…♡ごきゅっ、はふ、…んあ♡」

唇がふやけるほどの長い長いキスで口中に溜まった唾液が喉を鳴らす。

飲みきれず、液体が溢れ出すのなんてお構いなしに口内を愛撫され、滴る汁はもう、どちらの分泌した液なのか分からない…。

口の中、ぜんぶ、玲くんに占領されてちゃってる…♡

ぢゅう…♡、くちゅ、くちゅあ♡、ぢゅううう…♡ んぱっ♡

高い粘音を鳴らして唇が離れる。彼の口から溢れ出た唾液が滴り落ちて、私の唾液と混ざり合って、たたり…♡と口元から首筋を伝っていく。

「はっ…、はあ…♡」

少しだけ二人の身体が離れて、荒い吐息の音が響く。彼の瞳は熱に浮かされていて、瞳孔の奥にギラギラとした欲を潜ませている。

「涎、こんなとこまで垂れちゃってる…しょうがないなあ、拭き取ってあげるね♡」

彼の高い鼻先が私の首元に埋まる。すん、と鼻を鳴らしてから、はあ、と吐

き出された生暖かい吐息で首筋を撫でられ、ぞくぞくツと背筋が震える。

「ひあつ♡玲く、…そこ、擦りたい…っ」

彼の胸板を押して離れようとするけれど全くビクともしない。そのまま彼の舌が首筋から耳元へ脈をなぞるように上へ上へと這つていき、耳朶にんちゅ♡とわざとらしいリップ音を立てる。

耐えるように唇を甘く噛み締めて快楽を逃そうとするけれど、脳に響く甘い痺れが止まらない…♡

「…身体、触れるね…」

「うん、あつ…♡」

また唇を繋げて、離さないまま、ぷちぷちと寝巻きのボタンをひとつ、ふたつ、と外していき、繊細なレースの装飾が施された丸い膨らみが露わにされる。

肌と下着の境界線を指先でつつー…となぞられ身を振るとつるつるとした布は乱れて、肩を滑り落ちていった。

つつ、と指先はそのまま臍まで滑り落ちていき、ショートパンツの縁へと指をかける。

触れ合う唇の圧が徐々に強くなり少しづつ後ろへ倒される、頭を枕に沈ませる頃にはもう、衣服は床へ落とされて布の塊となっていた。

「下着、可愛いね。この…腰の紐、解いたらどうなっちゃうのかな…？」

「あつ、そ、それは…」

「それに、ほら…ここ、乳首ギリギリのところまで透けてるよ。すごい…、えっ…♡」

「う、えと、そ、その…喜んで、くれるかな、って、思っで。でも…そんなに見られると、恥ずかしい…」

「見るに決まってる、僕のために選んでくれたってことだよ…可愛い♡」

玲くんは目を細めてご満悦に微笑むと私の顔横に手を付き、自身の体重を支えるようにして覆い被さる。赤らんだ妖艶な顔が近づいて左臉に軽くキスを落とす。

「ありがとう、すごく…うれしい♡」

彼は髪を人束揃って、つるりと撫でた後。胸元の柔らかい膨らみに、ちゅっちゅっ、と唇を押し当てて。まんまとした形を確かめるみたいにワイヤーラインを撫で上げて、そのまま背中へ手を回すと、…ぱちん。

「…っ♡」

「せつかくの綺麗な下着、汚れちゃったら大変だからね」

弾ける金属音と同時にアンダーの締め付けが解ける。

緩まった肩紐がするりと落ちて、カップをふわりと剥ぎ取られてしまう…。
ぶるんつとまろび出たおっぱいがやっぱり恥ずかしくて思わず両胸を覆い隠す。

「こら、だめ。…ちゃんと見せて♡」

「う…、み、見られるの、…恥ずかし…」

「ふふ、恥ずかしがり屋なのも可愛いね…けど、やっぱりだめ♡」

私の指を優しくなぞつてあやすと、両手は絡めるとられるように奪い攫われてしまう。

空気に晒された胸に玲くんの視線が突き刺さる。

「綺麗だよ…ここはふんわりしてるのに、こっちはキュって引き締まって良い造形美だ…♡」

身体のラインを確かめるみたいに触れるか触れないかでなぞり撫でられるも

どかしい手付き。

脇腹から乳房の膨らみあたりをさわっ…って触れられてから、玲くんの骨ばった長い指がふにゆり…とおっぱいに触れて沈み込んでいく。

ふに♡ふにん♡、もにゆもにゆ♡

「おっぱい、ふわふわのもちもちでずっと触ってなくなっちゃう…」

「んっ、あっ…♡、ふ♡」

ふわふわと包み込むような優しい手付きは、段々と揉みしだくようないやらしいねっとりした動きへと変わっていき、ふにやふにやと形を変えるおっぱいがいやらしくて、息が上がっちゃう…♡

「あっ、んっ♡、触り方あ、んんう…あっ♡」

「ん？触り方？、好き…ってことかな…？うれしい♡、…でも、…こっちの方

が好きだよね♡♡」

カリッ♡

「ひゃッ…っ…ッ♡」

膨らみの頂に与えられた、たった一掻きで全身に快楽の電流が痺れ流れる。
下腹部の奥に力が入り、きゅん♡きゅん♡とした余韻が治らない…。

「あは、当たりだ♡身体跳ねちゃって可愛い…。ふふ、可愛い子にはよしよししてあげないとね…♡♡」

ゆるく勃起上がった乳首を撫で転がすようにくるくる♡こねこね♡指腹で遊ばれて頭の中ぜんぶ気持ちいいで塗りたくられちゃう…♡

「んお…♡、そり…え、乳首だめ…ッ♡」

「だめじゃないでしょ…？ほら、乳首硬くなってきた…♡」

先っぽタップするみたいに指で叩かれてとんとん、って軽く押されると抑えられない短い嬌声が出てきちゃう。

とんとんされて膨らんだ乳首、奥にむぎゆう…って押し込まれるとじんっじんっ♡って気持ちいいのが先端に響いてたまらない…♡

「あう…♡しゅご、乳首気持ちい…んッ♡」

「うんうん、気持ちいいね…♡た〜くさん感じようね♡♡」

親指を合流させてくにくにい♡と揉み捻るように摘まればそこから広がる強い刺激に口端がだらしなく緩む。

硬くなった乳首の先っぽ爪でカリカリい♡って引っ搔かれるとピリピリと電流が流れるみたいに気持ちいい…♡

「つぶ…んあ♡、刺激つおいしい♡♡、…ひつ、あつ♡」

時折、先端をピンッ♡ピンッ♡つて強く弾かれて、その度にビクン♡ビクン♡と勝手に身体が弾み上がる。

強い刺激がたまらなくって頭を仰け反らせると、胸を突き出しているようなポーズになってしまつて恥ずかしいのに身体が言うことを聞いてくれない…。

「ふふ♡自分から弱いところ突き出しちゃって可愛いなあ♡♡」

「あつ♡、う…ちが、ツ…♡♡」

「ん？でも、ほら、指近づけると擦り寄ってくるよ…」

「んん♡、だ、だってえ…あつ♡んん~~~~~ツ♡」

だって、玲くんが気持ちいいことばかりするから。と言いたかったけれど、嬌声になって消えてしまった。

たった二つの小さな矢りへ留まることなく与え続けられる刺激に、あっ♡あっ♡と喘ぎ狂うことしかできなくて頭が真っ白になっていく…。

「んっ、んんう♡、あっ…ふう♡、ひっ♡」

「声、甘くなってきたね…、イキそ…?」

「あっ♡うっ…?わかん、あい…♡きもち、い…♡」

「うんうん、そっかあ♡」

カリカリカリカリカリカリカリ…♡♡♡

優しく甘い声とは裏腹に指の速度はどんどん加速していく…。絶え間なく走る電流のような快感が昇り詰めて、グリッ♡と一際強くこねられたその瞬間。

「あっ♡あっ♡、んお…♡♡♡、~~~~~~~~ッ♡♡♡」

足の指先にぎゅうと力が入って、声に鳴らない快樂と共にビクビクッ♡と今までにないくらい身体が跳ねて絶頂する。

「ふふ、上手にイけたね…♡顔も、耳も、身体も真っ赤になって可愛い…、乳首も…ん、だいぶ大きくなってきた…♡」

何度も何度も擦られてイッた乳首は赤く膨らんでツン…と上を向いている。指を離された余韻がおっぱい全体にじーん…♡と広がって熱を孕んだ荒い息が胸を上下させる。

ちゅ♡

赤く火照った胸元に優しいキスが落とされる。

柔らかい箇所にも何度も唇を落としていく、玲くんのサラサラの前髪や鼻先が触れてこそばゆい…。

ちゅ♡ ちゅう♡ んちゅ♡

「ふふ、さつきから太腿、擦り合わせてもじもじしてる…♡」

目を細めて少し悪戯そうに微笑むとその端正な顔が近づいてくる。

柔らかい唇が重なり合って瞳を隠ると、玲くんの右手がつつ…とヘソを撫でて、その下へ伸びる。

その指先の行き先が分からないほど初心ではないけれど、思わず身構えてしまふ。

「…そんなに強張らなくても大丈夫」

私の緊張を解すみたいにひたすらに甘く優しい声で囁いて、さわり…と内腿をなぞる。

「力…抜ける？」

「う、ん…」

彼の甘い誘惑にドキドキと胸を高鳴らせて、少しづつ股関節の力を抜いていく。

押し入るように彼の右手がクロッチ越しにふにん…♡と秘部の柔肉を押して、そのままふにんに…とマッサージされるように揉み込まれれば、肉の奥にじんわりとした熱を籠もらせていく。

「ふっ…はあ…♡」

「下着濡れてる、今触ってるから？…それとも、もつと前からかな？」

「う…、それは…あ♡」

しゅるり…

「あっ…♡」

「…この紐、解きたくつてずっとウズウズしてた…♡」

腰に結ばれたりポンを解いてべとべとのクロッチを抜き取れらると、ついに糸纏わぬ姿になってしまう。何度も身体を重ねているけれどこの、そわり、とするもの恥ずかしさはいつまで経っても慣れない。

「まだ外側触ってただけなのに、割れ目から愛液溢れてきちゃってるよ…♡」

「んんっう…♡だ、だってえ…♡」

「うんうん♡気持ちいいから仕方ないもんね…♡」

ずりい♡と肉の割れくちを確かめるようになぞられて、その奥がじゅわり♡と熱っぽくなっていく。

「もうちょつと、足開かせてね…♡」

むつちりとした太腿の内側をがっしりと掴まれて、股を左右へ割り裂かれる。ぴちゃ♡という水音がしてその目で見ずとも秘部の状態が想像できてしまつて、顔から火が出そう。

「ん、恥ずかしいのにちゃんと足開けてえらいね、いい子…♡」

ちゅ♡

「んひゃ…ッ♡」

太腿の付け根際に玲くんの唇が当てがわれて生ぬるい感触にぴくん♡と身が強張る。

自分の股の間に埋まる黒くて丸い頭がモゾモゾと動くたびに、割れ目を囲う

柔らかい箇所へふにつふにつ、と唇が押し当てられてソワソワしてしまう。

「まって…やつぱり、これッ…恥ずかしいし、そんなとこ汚いよ…」

「君に汚いところなんてあるわけないでしょ…、大丈夫♡」

太腿を抑えていた両手が離されて、柔らかい盛り上がり指で左右へ押し広げられる。

先程足を開いた時よりもねっとりとした、くぱあ♡という粘音を立ててぱつくりと開かれたそこはどこまで彼に見られてしまってるんだろう…♡

「あう…♡あ…♡」

「わあ…すつごい…♡まんこ奥までとつろとろになってる…♡」

見られてる…と思えば思うほど凝視されている箇所がヒクついて、穴の奥からこぼり…♡と液が溢れ出る感覚がする。

彼の頭がまたゼロ距離に近づいて、伝う液体を舐めとるように舌先が触れる。

ぺちゅ♡…れる♡れるおお♡♡♡

「ふっ…あん♡…♡♡♡ひううッ♡」

膣口を囲うびらびらとした肉ひだを下から上へねっちより♡舐め上げられてゾワゾワとした快楽が頭の先まで昇っていく。

上へ伝っていった舌先がさわ…♡と未だ皮を被った秘豆を掠めると微弱な刺激でもびくり♡と体が震えてしまう。

「…そつちも、早く触ってほしいよね♡」

その反応を彼は見逃さない…。

ふう…と吐息をかけられて、甘やかすような優しいキスがその粒へ落とされ

る。優しいキスなのに痺れるような刺激…♡思わず出た甲高い嬌声が自分のものではないみたい。

「ひっ…う♡アッ…、んんッ♡」

触れた唇からチョロ♡と舌先が出て陰核をチロチロ舐めたり、押し潰したりされて、混み上げる快感にたまらず足指をぎゅっと閉じたり、開いたりと暴れさせる。

止めどなく与えられる快楽で、刺激に弱いソコはすぐにむくり♡と剥き出しにされてしまった。

「っっッ♡ふぁ、んッ♡」

「ん…、ちよつと大きくなつたね、クリトリス♡」

「んんう♡れ、玲くん、が…たくさん舐めるからだよ…♡」

「あは♡じゃあこれからもっつと大きくなっちゃうね♡♡」

今度は、はむり♡とくりトリス全体を口に含まれて生暖かい吐息と共にぬめぬめ♡舐め回される。

舌先を硬くしてクリトリスの付け根をぐりつぐりつとなぞられると決るような快楽が突き抜けて腰が引けてしまう。

「んあつ、ふうッ♡ひうッ♡、…あッ♡」

濡れた舌先が、柔らかい唇が、ぴと…♡ぬちゅ…♡つてその一点に当たるたびに、甘い痺れがどんだん脳を支配していく。

気持ちいい…♡気持ちいい…♡つてそのことしか考えられなくなっちゃう。

ぢゅッ♡ぢゅううううう…ッ♡♡♡、…ちゅぱッ♡

「…~~~~~ッ!?♡、あッ……♡」

蕩けそんな快樂の波に揉まれている中、突如吸い取られちゃうんじゃないかってくらいの勢いで強く吸引されて全身が小刻みに震える。

引つ張られたクリトリスを勢いよく口から離された衝撃で一際ビクウツ♡と身体を弾ませると、ぐつたりと全身の力が抜けていく。

小さな粒からじんじん…♡気持ちいい余韻が止まらない…♡

「ん、はあ…♡甘イキした？それとも、もうイッちやったかな…ふふ♡ピンつて勃起上がったクリトリス、てらてら光つていやらしくなってる♡」

「う…玲くんのせいだもん…♡」

「そうそう、僕のせいだね♡」

そう言つて笑う彼の口周りがべちゃべちゃに濡れているのが相まっていやらしい。

「うんうん♡僕のせいでおまんこから溢れるくらい愛液濡れちゃつてべつちやべちやの大変なことになってる…♡これは責任もつてお掃除してあげないとね…♡」

「えっ、あッ♡」

ぢゅううううううううっ♡♡♡ぢゅる♡

私のおまんこにピッタリと口付けて溜まりに溜まった愛液を吸い上げる。その吸引が私の膣内をうねらせて、また足先に力が入っていく。

口を離した彼のゴツリとした男らしい喉仏が上下にぐくり、と動いて私の体液を飲み込んでる…♡

「おかしいね、こんなに吸いあげてるのにどんどん溢れてきちゃう…♡」

「はあ♡はあ♡…だ、だつて…こんな、吸われるの気持ちよくなっちゃう…」

「そっかあ。じゃあもつともつと気持ちいいのあげるね♡」

再び濡れそぼった溝へ頭を埋めて、今度は搾り出すようにうねる舌先が穴を抉り舐める。

膣から掬い取るようにぐりぐりい♡と舌先で蜜を掻き出されて、入り口をぬぢぬぢ♡となぞるように掻き回されれば、またとぶ♡と愛液を溢れ返させる。

「あ♡…うう、んんッ♡、ぬろぬろで、掻き出される…の気持ちいい♡」

うわ言のように呟くと、ふふつと笑う吐息が舐められている箇所^{箇所}に吹きかかって、唇が更にピッタリと密着する。

舌先が穴の奥へ差し込まれると膣壁をねつつとりほじり舐め取られて、身体^{身体}の奥からじゅわじゅわあ…って快楽の波がとめどなく襲ってくる。

舌が深く刺し込まれる度に高い鼻がクリトリスをつん♡とタップして声にならない仰け反るほどの刺激が身体を突き抜ける。

「あッ♡……♡……♡ッ♡♡」

「ん、…気持ちいい、つて褒められたから張り切っちゃった…」

頬を赤く染めて照れている様子だが、私の股の間から頭を上げ膝立ちになった彼の下半身が目に入り、とても可愛いとは思えなかった。

柔らかい生地のスウェットズボンがピンと張り裂けんばかりに布地を張らせて盛り上げりを見せている。その下に隠れる彼の昂りを思わず想像してしまう…。

「そんなに見つめられると、恥ずかしいな…♡」

「あつ、え、と…」

主張の激しいソレを無自覚とはいえ見つめてしまっていたことを指摘され、自分の内なる欲望を暴かれた気がして声が詰まる。

「あは♡いいよ、…ちゃんと見てて…♡」

スウェットの腰ゴムへ親指をかける彼の手がやけに妖艶に見えて目が離せない…。

ずる、ずる…と下着を巻き込んでゆつくりと降ろされていく度にガッシリとした腰の際どいラインが見えて生唾を飲む。

ぐいつ、…ぶるるん♡

腰ゴムで頭を抑えられてから、硬度をもった肉欲が弾むように頭を揺らして勢いよく突ん出る。

血管を浮き立たせてとくとくと脈打つ棒の先端からは、ぬぷ♡と粘度の高い液が分泌されていてそそり勃つ肉棒の竿をたたり♡と伝っていた。

「あつ、すご…おつき…い♡」

「ふふ♡じゃあこの、おっきいのを今から君にナカに挿れるからね…♡」

猛々しく反り返るそれにするりとゴムを滑らせて被せると、再び腰を近づけてぴちゅり♡と入り口へ当てがわれる。

「んっ♡…はあ♡」

「腰浮いちやつてるね…期待、してくれてる…?」

「だ、だって…え♡お腹の奥、うずうずして、止まんない♡」

当てがわれた肉棒はゴム越しでも燃えるように熱く、ぬめりに頭を擦り付けるみたいにぬちぬち♡ぬちぬち♡割れ目を舐める。

下から上へ這わされると穴の浅いところに引っかかってその先を早く早くと腰を動かして求めてしまう…♡

「あ…ッ♡ふ、玲く、ん♡ナカ、さみしい♡…ッ早く…欲しいよ…お♡」
「ん、はあ…そうみたいだね…ッ♡」

焦点を定るようにピタリ…と肉棒の丸い切っ先がヒクつき渴望する箇所で止まる。

柔らかく充分に蕩かされた受け入れ口に、ぐぐつと体重をかけられれば、ぬぶぷつ♡と一際卑猥な音を立てて、硬く熱いものが沈み込む。

膣口をぐに♡とこじ開けられる感覚…、玲くんのおちんちんが…入ってきてる♡

ぬぢっ♡、ごりゅっ、じゅぶぶぶぶぶぶつ…♡

「んんんッ♡はっ…♡あ…♡♡」

「ぐ、…う♡」

差し込まれる肉棒のエラ張った部分を飲み込むと肉壁を、ぞりゆりゆう♡と擦り上げられて奥へ奥へと決り拡げられていく。

異物感がじんわり…♡快樂へと溶けていって圧迫感が悦へと昇華されていく。

「う…あ…ナカ、気持ちいい…♡…だいじょぶ？痛くない…？」

「はあ…♡はあ…♡だい、じょぶ…♡」

「ん、よかった…。あともうちよつと頑張つて、ね♡」

かろうじて答えると、私の腰がグツと掴まれ引き寄せられる。浮き上がる腰の動きに合わせて、ぐりゆりゆり♡と一番深いところまで肉棒が達する。

ぶちゅう♡と行き止まりに肉杭が打ち込まれて、内臓が押し上げられる圧迫感でお腹いっぱいになっちゃう。

「ん、はあ♡あは、おまんこの奥まで…入ったね…♡」

「う、奥…う、きてる…♡はっ…はっ♡おちんちん…おっき、…いい♡」

みつちり…♡奥まで埋め込まれた肉塊。最奥を押し潰すほど長く、膣道のひだをぷりゅ♡と圧迫するほど太い、玲くんのあつついおちんちん…♡
浅い息遣いを繰り返す彼の緩んだ口元が近づいてきて、ちゅう♡と唇を繋ぎ合わせる。とどちらからともなく視線が絡み合う。

「ね、ちゅっ、好き…♡大好き…♡」

「私も、好きだよ…♡んっ、玲くん、大好き♡」

熱に浮かされた瞳が幸せを噛み締めるみたいに甘く優しく蕩ける。

ぎゅ♡と上半身も密着させ、玲くんの硬い胸板に包み込まれると強張った身体力が少し抜ける。

ナカに咥え込んだゴム越しのおちんちんがどくりどくり♡とする拍動を感じる。その生々しい感覚を感じとると圧迫された奥がじゅわ…♡と疼ぎ始めて、

腔壁が玲くんのおちんちんを形取ってびったり♡と馴染んでくる。

「あ♡とろとろおって柔らかくなつて引つ付いてきた…、初めての頃より早く馴染むようになってきたね…僕のおちんちんの形、覚えてくれたんだ…♡」

頭を撫でられて、汗で前髪の張り付いたおでこに優しい口付けが贈られる。

ご褒美みたいに甘やかされて、嬉しくなつて…率直にも啞え込んだ肉棒をゴクリゴクリ♡と飲み込むようにおまんこうねりだしちゃう…。

「あ…ッ♡今度は吸い付いてくるみたいちゅうちゅうつてうねってる…♡」

「う。ぜ、ぜんぶ、言わないで…え♡」

言葉に出されると全て暴かれてるみたいで一気に顔が熱くなる。

恥ずかしいから抑えたいのに、恥ずかしいって思えば思うほどナカは収縮してうねうね♡ちゅうちゅう♡と搾り取る動きをやめられない…♡

「ぐッ…あ♡…だいじょぶ…そんなに慌てなくたって、ちゃーんと気持ちいいのあげるから♡」

眉間に皺を寄せて苦しそうに眉を歪める、その表情が艶を纏っていて色っぽい…と見惚れていると浮かされた腰を掴んだ手の指が食い込む。

「動くね…♡」

その言葉を皮切りに肉杭が上へぐいつ♡とより深く沈められて、結合部がぴつたり密着する。

柔らかくなつた最奥を丸く膨らんだおちんちんの頭で、ぐにっ♡ぐにっ♡と撫で潰されて足指がガクつく、それでも逃げ切らない快楽に奥歯が震えてしまう。

「あっ♡うッ、~~~~~ッ♡、あッ♡」

最奥に詰んのめられた肉棒が纏わりつく膺ひだをつぶ♡つぶ♡逆撫でて、ずり♡と引き出され始める。

彼の形に添って馴染んだ柔らかい肉を出つ張った雁が抉り、出て行く寂しさに、行かないでえ…♡って縋るみたいに吸い付いちやう。

「んんう…♡ふう…~~~~~♡、ぐうッ♡」

ずろろろろお…♡と濡れた太竿が姿を見せ始めると隙間を閉じていく膺奥が寂しくて、入り口に残った亀頭をぎゅう♡ぎゅう♡と握って切望してしまう。締まった膺口にくびれが引つ掛かって浅いところ、ぐりい♡って擦られて私が締めて当たったのに思わぬ刺激に身体が跳ねる。

「うぐッ、…ふ♡すっごい吸い付いてきてかわい…♡そんなにちんこ引き出さ

れるのさみし…??♡」

こくり、と頷こうとした時。

ずりゆう♡にゆぶぶぶぶぶぶぶぶ…ッ♡♡

ふつといおちんちんがまたおまんこを抉り割り裂いて、切なく蜜を溜めた膣壁をぬりゆう♡と擦り上げて挿入される。

最奥が近づいてくると剛直は一気に速度を上げて、ぐぐイッ♡と股関節が軋むほど股が押しつけられる。

長く反り返ったおちんちんをどっちゅう♡って奥まで咥え込まされて喉から声にならない声が絞り出されちゃう。

「…ッ!あ、~~~~~ッ♡♡」

「大丈夫♡すぐにみっちみち♡に寂しがりのまんこ、埋めて…ッ♡ぶにぶにの

子宮口こうやってどちゅどちゅ♡突いて…ッ♡、さみしい思いなんてさせないから…ねっ♡」

動き出す彼の滴る汗が腹胸にかかる。

ねっとりとした抜き差しを繰り返されるたびに、ぬちやあ♡ぐちよお♡って粘性を増した愛液が結合部に纏わりつく。差し込まれた肉槍が濃厚なキスをするみたいに子宮口をぐりぐり♡撫で回してたまらない…♡

「あっ♡、あッあッ♡、んんッ♡」

奥突かれる度に、揺らされるおっぱいがぶるん♡ぶるん♡と暴れる。
突き刺さる衝撃が乳首にまで届いて触られてないのに勃っちゃう…♡

「あ、はッ♡おっぱいふるふるってするのえっちすぎ…♡たままない…ッ♡」
「んっ、んんう♡あ、激し…ッ♡」

ずしい♡ずしい♡と奥を突く間隔が段々と速くなって、パンッ♡パンッ♡と肌のぶつかる振動が激しく身体全体にまで響いてくる。

「おッ♡あッ♡♡♡、ッ……んん、………んッ♡ぐッ………♡」

「ッ♡はっ♡…もお、声抑えちゃだめ…でしょ♡」

喉の底から搾りでるみたいな声が恥ずかしくて口元を抑えようとするけれど、左右の手はそれぞれ彼の両手で掴み取られて叶わない。そのまま手首を掴んで、腕を引っ張られて固定されてしまう。

「ふ、え…？♡」

「声抑える余裕なんか、なくしちゃおうね…♡」

じゅちゅッ♡じゅちゅッ♡♡♡じゅちゅじゅちゅちゅちゅちゅッ♡

もう絶え間ないくらい彼の腰がずんッ♡ずんッ♡打ちつけられて、腰が逃げそうになっても、その捕まえられた腕が全然逃してくれない…♡

腰を反らして喉を上向かせても、枕が上にずれていくだけでどちゅどちゅ激しく突き扱られる律動は緩まらない…♡

「うッ♡あっあんっ♡、ま、待つてえ、…イクッ♡…ッ♡いつちやうッ♡」

快楽を逃す場所がなくって、ただひたすらに身体をくねらせ腰を反らせては屈ませて、あっ♡あっ♡あっ♡と喘ぐことしかできない♡

「いいよ♡ほら、イッて♡♡♡」

「うあ♡、あっ♡あっ♡あっ♡ッ、イクッ♡…♡…♡ッ!?♡」

刺激を与え続けていた彼のピストンが最奥でとまってぐりい♡と一際深く突

き刺される。その瞬間、大きく腰を反らせて、目の奥がチカチカ♡弾けるような絶頂を迎えて果てる。

余韻でピクピク♡と全身が痙攣して身体力が抜けていくと、手首を離され支えがなくなった身体はくったりと項垂れる。

「イツ…たね♡汗ばんで、赤くなつて、くったりしてる…♡可愛い♡」

ふわふわとする意識の中、下腹部のナカのがずつしり…と質量を増してぴくつ、と動くのがわかった。絶頂を迎えて敏感になったナカはその刺激だけでも大きい悦になる。

「あう♡…待つて、え♡まだ、敏感に、なつて…のお♡」

「ッ…ごめんね♡そのえつちな表情見てたら、もう、我慢できない…♡」

更に硬度を増した肉棒が、ばちゅん♡と打ち付けられ、ぐちゃぐちゃ♡と

性器を掻き乱す音が頭に響いて脳みそがクラクラする…♡

膣壁をごしゅごしゅ♡抜かれて、奥を抉るほどぢゅう♡と啜え込まされて、出っ張った雁首でごりゅごりゅ♡掻き乱されながら抜けないギリギリまで引き抜かれて、また挿れて。

「あゝッ♡イキまんこ気持ち…いい♡、好きっ♡大好きっ♡…ッ♡」

「おうっ♡玲く、あたしもっ♡、好きっ…いい♡んんウッ♡」

とろとろの蜂蜜で角砂糖を溶かしたような甘い甘い愛の囁きを送り合う。

ゆさゆさゆさゆさ♡劈くように揺さぶられる中、もつと近くで彼の体温を感じたくて両手を伸ばす。ビクつく身体は全然力が入らなくて彼のおっきな肩が遠く感じて切ない。

「ふふっ抱き締めようと…ッ♡してくれてる…？うれし…♡」

腰の動きは止めないまま汗ばむ胸板をぴと…と近づけて密着させて貰えて、
やっと彼のがつしりと骨ばった肩に腕が届く。

玲くんの腕も私の背中に回されて、お互いの身体を宝物みたいにぎゅっ♡つ
て抱き締め合いながら腰を打ち付け合う。

「あっ♡あぁっ♡やつと届いた…あ♡、…おッ♡」

うれしくって玲くんの揺れる腰にぎゅうつ♡と両足で抱き着く。

挿入される肉棒の角度が上向きに変わって、上下にずどッ♡ずどッ♡つてお
ちんちん突きつけられてポルチオ叩きのめされちゃうのに足緩めらんない♡

「はぁっ♡それ…ッ、可愛い、けどッ♡、くっッやばい…ッ♡」

「おッ♡、ひぐッ♡…え、あッ♡♡…ば、イきそ…お♡」

「うう…ッ♡いいよ…ッ♡僕もキてる…、一緒にイこ…♡」

はぐっ♡ぢゅうう…♡、れろっ♡くちゅくちゅ♡

口を開いて齧り付くようなねっとり濃厚なキス…♡
じつとりと濡れた粘膜をざらざらの舌で擦り上げられて、あつつい舌を互いに重ね合つて蕩かしていく。

「ふう♡…う、んんう♡あっ♡、あっ♡」

どちゅっ♡どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅっ♡

いく寸前のキッツイ本気ピストン♡

「イツ、く…う♡、くくくくく♡♡♡♡」

「ぐっ…♡射精…♡…♡…♡…♡…♡」

律動が最奥で止められてぐぐイ♡と押されると、おまんこの一番奥にゴム越しのびゆるるるるるるるっ♡って勢いのついた液体がぶつけられて子宮の入り口にぐりっ♡ぐりっ♡って亀頭が擦り付けられてる。

脱力した身体を引っ付けあって互いに荒い呼吸を整える。

ずろろろ…♡っっておちんちん引き抜かれると、カリ高の先端がにゅぽん♡っで栓を外すように抜けて、余韻の残った身体をまたビクつかせる。

じゅん♡ってした余韻とか、触れる彼の体温があつたかくて、頭がふわふわしてきた。

もう指の一本も動かさないくらいくたくた…♡

ベッドの中、彼女は眠っている。

行為でじつとりと汗ばんだ肌を洗い流すため脱力しきった彼女を抱えて浴室へ移動したけど、彼女の火照った柔い肌に触れると胸の底から湧き上がる情欲を抑えられなかった。

結局、限界まで彼女の敏感なところを責め立ててしまい。逆上せか、体力の限界か、朦朧とする彼女を横抱いてベッドまで運び、今に至る所存だ。

彼女は先程までの乱れた呼吸とは違って、穏やかに規則正しい寝息をたてている。

「寝顔も、可愛い…」

彼女の頭とマットレスの間に腕を通し入れ、そのまま抱き締める。

柔らかな髪が心地いい…、彼女の匂いが僕を満たして、うっとり僕も瞼を閉じる。

夢に落ちる最中、腕の中で眠る彼女に、あの夜、勇気を出してよかったと想いを馳せた。

「玲くくくん、起きてくくくく！」

既に朝日は昇りきって真上に近い、昨晩寝るのが遅くなったとはいえ流石に…と彼の身体を揺らして目覚めを促す。

「うう…」

彼が唸るように身を振って、整った顔が勿体無いくらい顔をくしゃくしゃに萎ませると目を瞑ったまま身体を起き上がらせる。

「おはよ！もうお昼だよ」

「んゝゝ」

目も開ききつてない寝ぼけ眼でカクカクと首を揺らしてる姿を見て、起き上がりこぼしみたい…なんて笑っていると、不意に顔が近づいて、ちゅ。と口付けを落とされる。

「ん…!？」

「ふふ…おはよ。」

あまりに突然なキスに目を丸くする私を見て、玲くんは、ぽや…と微笑むとそのまま立ち上がって洗面台へ向かっていく。

「…寝起きから大胆すぎる……。」

ポツン…と一人残されて顔の熱を冷ましていると洗顔を終え目を覚ました玲くんが戻ってくる。

「起こしてくれてありがとう、寝過ぎちゃったかも…」

「いいいえ、すっごい気持ちよさそうに寝てたよ」

彼の寝顔を思い出してクスリと笑みが溢れる。

「君の隣で寝ると幸せなんだよね…安心するとか…落ち着く…」

「そ、そう…？と、ところでっ、今日はどこかお出かけする？」

恥ずかしさを大雑把に誤魔化して今日の本題を投げかける。

「うん、いいね。君の行きたいところならどこでも着いてくよ」

「う、うん…」

実は最近、悩みがある。彼から外デートに誘われたことがない。

誘えば来てくれるし、楽しそうにしてる…と思う。

でも、自分から提案してこないってことはあまり乗り気じゃない…？とか最近考えちゃう。

「玲くんが行きたい場所とか…ないの？」

私の問いかけにしばらく考える仕草を見せた後、「ない、かなあ…」と彼が答える。

愛されていると思うし、彼の言葉に嘘はない。って信じてる。

…けど、家デートにしか誘われないってやつぱりそういう目的だけ…？って不透明な不安がよぎっちゃう。

「じゃあ、今日は家にいよっ」

そんな気持ちで外出してもモヤモヤが増えるだけ。

誤魔化すみたいに彼に抱きついて、今日の予定は家デートでゆつくりと決まった。

とある休日の昼間。

「想いを伝える」をコンセプトに掲げた最近話題の洋菓子店。

流行り物が大好きな友人に誘われてなんとなしに来てみたけれど、店一面に敷き詰められた色とりどりのお菓子里にときめきが止まらなかった。

「ひとつひとつに意味が込められてるのね。」

ピンク色のキャンディーには「好き」、丸い形のチョコレートには「ありがとう」、といったシンプルなものから、「私は貴方の虜」、貴方を忘れない。など複雑な意味を込められたもので、その種類は有に100を超えていた。

膨大な種類の中から悩みに悩んでなんとか絞り込み三つのお菓子を選んだ。もちろん、最愛の彼に向けて。

ラッピングを待っていると、スマホが震えて通知を知らせる。今しがた思いを馳せていた彼からだ。

渡したいものがあるんだ、会えるかな？

目に映るメッセージに、今まさに自分も同じことを思っていたことが嬉しくなっ
て思わず顔が綻ぶ。

〇の返事を返そうとスマホに添わせた指が店員の声で止められる。

「お客様、お待ちせしました。」

「ありがとうございます！」

小ぶりだけれど可愛くラッピングされた品物を受け取る。なんでもない日の
プレゼントにピッタリのサイズ感だ。

「お相手さんのこととつても大切にしているんですね、きつと喜んでくれます
よ！」

「そうですかね…！たのしみです！」

愛しい彼の綻ぶ笑顔が浮かび、体温が上がるのを感じて思わず頬が緩んだ。

友人と別れた後、小洒落た白い紙袋を片手にいつもの道を歩く。道すがら何度かスマホを見ては確認したけれど、返信したメッセージに既読は付かなかった。

「家の前まで着いちやつたな…」

いつもなら秒で既読が付けられるメッセージ。

まあ、すぐ見れないこともあるだろう、と納得しつつも、会いたかったな…

と名残惜しく彼の家へ目を向ける。

「…あれ、もしかして玄関開けっ放し…？」

よく見れば彼の家のカーテンの隙間から零れる光もない。一抹の不安がサアとよぎり、庭を抜け無防備に開けられた玄関から中を覗き見る。

廊下の奥のその先、リビングに差し込む月明かりが縮こまった男のシルエツトを浮き彫りにしている。

「玲くん…!？」

考える前に駆け出して膝を抱える男に寄り添う。

やつぱり、玲くんだ…。

彼の肩に手を添えるとぴくり、と動きを感じとる。

よかった、生きてる…。

詰まった息が少し吐き出される。

「玲くん、大丈夫？ けがとか、してな…っ！
…聞きたくない。」